

辛くなった時は夜空を眺めていた。それは僕にとって、欠かすことができない営みだった。

夜空は全てを包み込んでくれる。悲しみも、辛さも、苦しみも全て否定も肯定もしてくれるわけではない。ただ包み込んでくれるのだ。

しかし、今日の夜空は違う。僕は高鳴る心臓を堪えながら時計をチェックしていた。

「私たちが 22 歳になった 22 時 22 分 22 秒。この場所で会おうね」

あの日、彼女は優しく微笑みながらそう言った。彼女にとってそれは冗談だったのかもしれないけれど、僕にとっては間違いなく今日まで生きる糧になっていた。果たして僕は、優しい大人になれているのだろうか。

「あと五分・・・か」

僕は寝転がったまま、ゆっくりと周りを見渡した。茂った青い芝生だけが夏のそよ風でサワサワと揺れて季節の到来を告げる爽やかな風の香りを辺りに蒔いていた。天気は快晴。満点の星空だ。

「おっ・・・」

今日ここに来てから見つける、5つ目の流れ星だ。遠目に東京の夜景がぼんやりと見えているだけで、星の煌めきは何も色あせていない。

「変わってないね、流れ星を見つけると声が出ちゃう癖。」

ふと声がした。そよ風と混じってしまいそうな柔らかい微笑混じりだった。急激に高鳴る鼓動を抑えて、僕は確信した。ゆっくりと上体を起こして、振り返った。

「三咲ちゃん・・・」

「久し振りだね。元気にしてる？」

紛れも無い彼女だった。春色のピンクのカーディガンに、白のロングスカート。肩までかかった黒い髪がそよ風で揺られて、彼女の白い肌が月明かりに照らされた。

「22 時 22 分 22 秒ピッタリ。お互い几帳面だね」

彼女は僕の隣に腰掛けた。拳一つ分程、僕たちの距離は空いていた。これが僕たちの距離。僕が小学生の頃から何年もかけて、ようやく掴み取った距離感。

「は、は、初めまして。緒形三咲です」

転校初日だった彼女は目に見えて緊張していた。僕はそれをボンヤリと眺めていただけだった。今考えれば、僕にとって彼女が可愛かったからだろう。女の子を可愛いと思うことが恥ずかしいと思っていたから、必死に無心になろうとしていたんだろうと思う。本当に直感に過ぎなかったけど、僕に足りないところは彼女が補ってくれて、彼女に足りないものは僕に補えるのでは無いかと思えた。

勿論その当時「補う」なんて難しい言葉は知らなかったけれど、あの高鳴るような心の感覚を文字起こしすればそうなるだろうという事だ。

「じゃあ三咲ちゃんは、彼の隣の空いているところに座ってね」

「あ、は、はい」

彼女はぎこちない足取りで机の隙間を抜けて、窓際だった僕の隣にやって来た。

「よ、よろしく・・・ね」

声こそ明るかったが、彼女はうつむきがちだった。頑張らなければと思っている反面、緊張しているのだろうと感じた。

「あ、うん・・・よろしく」

僕はあの時、どんな声で返事をしたんだっけか。あまり思い出せない。

その日の二時間目。体育。彼女はドッジボールの授業で顔面に球を受けた。彼女の鼻からはポタポタと血がしたたり落ちて、今にも泣きそうな表情をしていた。

僕は慌てて彼女の手を引いて保健室へと連れて行った。今日に至るまで、彼女と手を繋いだのはあの日が最初で最後だ。

保健室で綿を詰め込まれた彼女の顔が少し面白くて、心の中で笑った。先生は会議が始まるからと保健室を出て行った。僕たち二人は保健室に取り残された。

「・・・」

静かな場所に來たからだろうか。僕は体育の授業に戻るのが面倒でたまらなくなっていた。

横目で彼女を見ると、彼女は保健室にあった赤チンの瓶を手にとって、細かく書かれている文字を睨んでいた。恐らく僕との静寂に耐えられなくなったのだろう。

「三咲ちゃんさ・・・」

「あつ、はい」

僕の問いかけに、彼女はハッと顔を上げた。そこまで改まれる程の話題を提供するつもりじゃなかった僕は、どこかバツが悪くなってしまった。

「いや、球技苦手なのかな一つて思っ」

「うん、苦手」

「そうなんだ・・・」

「・・・」

そこから三年後の小学六年生になるまで、事務連絡を除いて交わした言葉はそれのみだった。僕たちは特に言葉を交わすことなく、お互いに大きくなっていった。

彼女はその誠実で裏表がない性格からか、溶け込むまでに時間こそ掛かったものの、今ではスッカリと学校の一員となった。

僕たちのクラスは男子と女子が対立していた。僕は相手の性別にあまりこだわりがなかった為か、特に意識することもなく接していたが、皆はそれを「分け隔てなく接する良い奴」だとありがたい解釈をしてくれた。異性に向かって意見を伝えるときは僕を中間地点に挟んでいたことから、僕は架け橋と呼ばれるようになり、あだ名は「レインボーブリッジ」になった。長すぎるという為か、後に「レイブ」となった。海外の男の子みたいで、このあだ名は結構気に入っていた。

そんな僕が三年越しに彼女と話すきっかけとなったのは、近所で起きた土砂崩れのボランティア活動に行った時のことだった。家でダラけているくらいなら少しは世間の役に立って来いと母につまみ出されたのだ。

僕はタオルのハチマキとスコップを片手に歩いて現場に向かった。何からすれば良いのかも分からなかった僕は、被災者と思われる中年の女性に声をかけた。後ろ姿に明らかに覇気がなくて、話しかける時には少しためらった。

「すみません、何か手伝えることはありますか？」

その女性は僕を見て目を丸くしていた。当時の僕は、なぜ女性が僕を見てそんなに驚いたような表情をしているのかが分からなかった。

「そうね・・・じゃあ家から土を掻き出すのを手伝ってくれるかしら？」

女性はとても元気に返事をした。なんだ、元気だなと思った。僕が思ってるより大したことがないのかもしれないとも思ったが、今ならわかる。あれは大したことだった。

僕が作業を始めて一時間ほど経った頃だろうか。スコップで土を書き出していた僕の頬に、急に冷たい何かが触れた。驚いて振り返ると、そこには大きな買い物袋を片手に持っている三咲ちゃんが立っていた。

「こんにちは、ジュース飲むよね？」

「あ、うん・・・」

同じクラスにいても、あまり話す機会が無かった僕は緊張していた。

「えーっと、三咲ちゃんもボランティア？」

「違うよ。ここは私の家」

「えっ」

僕は絶句した。僕が話しかけた中年の女性は、三咲ちゃんのお母さんだったのだ。

「そっか・・・あー、まあ、うん・・・」

「・・・少し休憩しない？その辺りにでも座ってさ」

「だ、だね」

僕は彼女と材木の上に腰掛けた。その時は、腕を伸ばしたくらいの距離が開いていたと思う。

「今日は来てくれてありがとう」

彼女はしっかりと僕の目を見てお礼を言ってくれた。

「あー、うん」

素直にお礼を言われたことが恥ずかしくて、僕は思わずそっぽを向いてしまった。

「なんか、こんな風にして喋るの三年ぶりだね。三年前に私が鼻血を出した時以来」

「そうだね」

お互い別に避けていたわけではない。ただ、なんとなく二人の間にポツカリと穴が開いていたような感覚を持っていた。それは彼女もだったのだろう。クラス全体のバランス感覚もあったのかもしれない。

「あの時はクラスに溶け込もうと精一杯だったから・・・あんまり余裕なかったかも」

「ボールを取り損ねたのも？」

「それはタダの運動音痴だよ」

彼女は疲れたようにクスリと笑った。それは彼女から僕に向けられた初めての笑いだった。

早く彼女が元気に笑えるようにしてあげなければ。それからしばらく、僕は彼女の家から土砂を書き出し続けては、木に座って彼女とお喋りをしていた。

作業は日によっては夜中まで行われた。

「あっ」

「どうしたの？」

「いや、流れ星が見えたから・・・生まれて初めて見た。あっ、ほら又」

休憩ついでに寝転がっている時、重機の喧騒の中で僕たちは星空を眺めて語っていた。

彼女はいろんなことを喋ってくれた。

人形に名前をつけていること、転校する前は塾に通っていたこと、たまにお父さんと釣りに出かけていること。

彼女のことを一つ知れるたびに、僕はとても嬉しかった。

「三咲ちゃんは早く結婚できそうだね」

「どうだろうね」

「・・・ね、ねえ、三咲ちゃん」

「なに？」

「三咲ちゃんはどんな人と結婚したいの？」

僕の声が震えていたことをはっきりと覚えている。大丈夫、自然な会話の中での質問だと自分に言い聞かせた。

「そうだね・・・前は足が速い人とか、色々あったけど・・・今は優しい人がいい」

「優しい人・・・」

僕はこの 3 日間で色々な人を見た。色々な優しさを見た。僕が知っていた優しさは一つか二つしか無かったので、そんな優しさに触れる度に自分が何も知らないことが恥ずかしくなっていた。

「そっちは？」

三咲ちゃんは優しい笑顔で訪ねてくれた。今は公民館で暮らしている三咲ちゃんだって、泣きたくて辛くてたまらないに決まっている。でも、僕との会話の中ではそんなことを全く口にしない。彼女は優しい。そして・・・

「僕はね・・・強い人が良い」

「強い人？」

「うん。僕が強くないから」

「じゃあそっちの結婚相手はボクサーとかだね」

「いや、三咲ちゃんがいい」

その言葉は自分でも驚くほどスナリと口から出た。

三咲ちゃんは僕の顔を見つめたままだった。

「・・・」

真顔だった三咲ちゃんの顔が次第にほころんで、これまでに学校では見たことがないような笑顔になっていった。なんだか、家族にしか見せないような、満たされてあふれ出るような笑顔だった。

三咲ちゃんは無言のまま僕との距離を大きく詰めた。

僅か拳一つ分まで。彼女は僕を目を見つめながら、ユックリと近寄ってきた。ここまで人と顔が近づいた経験が、僕にはない。

「三咲！そろそろ始めましょう」

「あ、うん」

遠巻きに三咲ちゃんのお母さんの声がした。三咲ちゃんは立ち上がると、声がした方向に駆けて行った。息をすることを忘れていた僕は、大きく深呼吸をしてリズムを整えた。

「引っ越すことになったの」

翌日、手伝いに来た僕に三咲ちゃんは言った。

「え・・・」

「家、見てもらったの。でももうダメみたい。なんだか、岩そのものが塩分を含んでいたとかで、見た目は大丈夫でも時間が経つとダメになるだろうって」

「そっか、その泥水に何日も床ごと浸っちゃったから・・・」

「うん。だからもうこの辺の家は全部ダメなんだって。ごめんね、せっかく手伝ってもらったのに」

「いや、気にしないで。ところで、引っ越すってどこに？」

「北海道。おばあちゃんの家があるから。もう今日には引っ越すよ。荷物が無いし、簡単だった」

北海道。気軽に行ける場所じゃない。



「そっか、分かった。元気でね」

僕は悲しみを押し殺して笑顔を浮かべた。この数日間で学んだ、優しさの一つだ。

「じゃあ僕は帰ろうかな、うん」

「あ・・・ねえ」

「何？」